

氏名	ヤスイ ヒデオ 安井 秀夫
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	博第1333号
学位授与の日付	2024年3月31日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文題目	デザイン要素分析による杉本貴志の商環境デザイン作品のインテリア特性研究 (Research on Interior Characteristics of Takashi Sugimoto's Commercial Environmental Design Works Through Design Element Analysis)
論文審査委員	主査 教授 石松 丈佳 教授 北川 啓介 准教授 夏目 欣昇 教授 橋本 剛 (筑波大学)

論文内容の要旨

現代の日本において、インテリアデザインは人々の生活に深く根付き、重要な要素となっている。その中で、日本のインテリアデザインは、世界的にも高い評価を受け、国際的な舞台でその存在感を増している。しかし、インテリアデザインの本質と役割についての理解が深まっていない現実も存在しているのが現実であり、単なる物理的な空間や家具のデザインにとどまらず、人々の経験やライフスタイルに焦点を当てたデザインが求められてきている。これにより、インテリアデザインの職能が従来の枠組みを超えて拡大し、その存在が社会的に重要視されていくと考える。インテリアデザインは、単なる美的な要素であることを超えて、人々の生活や社会に対する深い影響力を持つ重要な分野であると認識されている。その本質を明らかにし、適切に活用することにより、より持続可能で意味のある生活環境を創り出すことが可能となると考える。

しかしながら、この急速な発展に対応するインテリアデザインの研究や理論の整備において「住環境デザイン」に関する研究は深まっているが、商業施設全体の「商環境デザイン」に関しての研究は進んでいない。このような課題を解決するためには、日本のインテリアデザインの歴史を詳細に検証し、「商環境デザイン」の本質を分析し、その価値を明確にすることが重要であると考えられる。

よって本研究では、日本のインテリアデザイナーの職能が成立した高度成長期から半世紀に渡ってインテリアデザイン界を先導してきたインテリアデザイナー杉本貴志の商環境

作品を研究対象とする。研究が遅れている「商環境デザイン」の分野に絞り、作品のインテリア特性を明らかにし研究することを目的とした。雑誌『商店建築』に、杉本が1972年から2018年までに作品を発表した117作品を研究対象とし、空間構成、素材、照明および環境生成化の視点から作品の構成要素を抽出し、そのデータを用いて作品分類を行う。

本篇は第1章から第6章までで構成されている。

第1章「序説」では、インテリアデザインの概要、歴史的背景、日本のインテリアデザイナーの世代分けによる杉本の位置付け、先行研究について述べ、本研究の目的を示し、その意義を明らかにした。研究の対象を杉本の商環境デザイン作品とする理由を説明し、商業施設は経済との関係が強いことを鑑み、研究の対象時期をバブル経済崩壊の前期と後期に分けて研究することを述べた。

第2章「方法」では、研究対象と研究方法について述べた。杉本が商環境デザイン作品を発表した全117作品のデータを収集して整理したうえでデータシートを作成し、商環境デザイン作品のデザイン要素を抽出した。抽出するデザイン要素は「空間構成要素」「空間仕上要素」「空間設計要素」の3つの要素とし、これらの出現頻度を用いて作品特性の把握、クロス集計・多変量解析による作品分類を行い、杉本作品の類型化と時代的特性および商環境での位置付けを試みた。

第3章の「結果」では、抽出したデザイン要素の出現表の一覧表を前期、後期に分けて分析結果を得た。すなわち、要素出現表を用い数量化Ⅲ類による分析を行い得点化し、クラスター分析を行った。その結果、分類された前期作品は5群、後期作品は10群に分類され、その作品群ごとにデザイン要素との影響関係を示した。

第4章の「考察」では、クラスター分析により分類された作品群ごとに作品のインテリア特性について考察を行い、杉本の商環境デザイン作品の特性を、前期と後期について明らかにした。前期はグリッドを採用したデザインから始まり、それからの離反や芸術家との協働などの手法を経て、独創的手段や材料による独自の編集手法に至ることを示した。後期にはバブル経済崩壊の影響を受け、既存や経済的素材など多様な要素を用いた新しい編集手法が展開され、大規模な空間への適用手法としても明らかになった。さらに作品群の時代推移とインテリア特性との関係も示した。

第5章の「総合的考察」では、杉本の商環境デザイン作品の時代的に3つの大きな分岐点があることを導き、4つの期間に分類して、杉本が影響を受けたと思われる事象とそれに関わるインテリア特性を解明した。さらに、半世紀に渡って第一線のインテリアデザイナーで君臨できた要因を示し、インテリアデザイナーの職能について考察した。

第6章では、各章で得られた知見を総括し結論とし、本研究の課題と今後の展望を述べている。

論文審査結果の要旨

本篇は第1章から第6章までで構成されている。

第1章「序説」では、インテリアデザインの概要、歴史的背景、日本のインテリアデザイナーの世代分けによる杉本の位置付け、先行研究について述べ、本研究の目的を示し、その意義を明らかにした。研究の対象を杉本の商環境デザイン作品とする理由を説明し、商業施設は経済との関係が強いことを鑑み、研究の対象時期をバブル経済崩壊の前期と後期に分けて研究することを述べた。

第2章「方法」では、研究対象と研究方法について述べた。杉本が商環境デザイン作品を発表した全117作品のデータを収集して整理したうえでデータシートを作成し、商環境デザイン作品のデザイン要素を抽出した。抽出するデザイン要素は「空間構成要素」「空間仕上要素」「空間設計要素」の3つの要素とし、これらの出現頻度を用いて作品特性の把握、クロス集計・多変量解析による作品分類を行い、杉本作品の類型化と時代的特性および商環境での位置付けを試みた。

第3章の「結果」では、抽出したデザイン要素の出現表の一覧表を前期、後期に分けて分析結果を得た。すなわち、要素出現表を用い数量化Ⅲ類による分析を行い得点化し、クラスター分析を行った。その結果、分類された前期作品は5群、後期作品は10群に分類され、その作品群ごとにデザイン要素との影響関係を示した。

第4章の「考察」では、クラスター分析により分類された作品群ごとに作品のインテリア特性について考察を行い、杉本の商環境デザイン作品の特性を、前期と後期について明らかにした。前期はグリッドを採用したデザインから始まり、それからの離反や芸術家との協働などの手法を経て、独創的手段や材料による独自の編集手法に至ることを示した。後期にはバブル経済崩壊の影響を受け、既存や経済的素材など多様な要素を用いた新しい編集手法が展開され、大規模な空間への適用手法としても明らかになった。さらに作品群の時代推移とインテリア特性との関係も示した。

第5章の「総合的考察」では、杉本の商環境デザイン作品の時代的に3つの大きな分岐点があることを導き、4つの期間に分類して、杉本が影響を受けたと思われる事象とそれに関わるインテリア特性を解明した。さらに、半世紀に渡って第一線のインテリアデザイナーで君臨できた要因を示し、インテリアデザイナーの職能について考察した。

第6章では、各章で得られた知見を総括し結論とし、本研究の課題と今後の展望を述べている。

以上は、商環境デザインには「業態」が大きく影響することも明らかとするなど、実践的インテリアデザイン手法に大きな示唆を与えるものとなることが期待できる。それは換言すれば本研究の分析方法が、新たなインテリアデザインメソッドの萌芽の契機と成り得ることが示唆されている点で貴重な論文である。

上記の内容は、人間-生活環境系学会論文集に2件（全て審査有）掲載に至っており、審査の結果、博士論文に相応しいと判断した。